

ACP 日本支部年次総会・講演会 2026 を終えて

琉球大学医学部医学科 6 年 稲嶺賢太郎

この度、6 月 27 日、28 日に京都大学にて開催されました ACP（米国内科学会）日本支部年次総会・講演会 2026 にて症例報告を行ってまいりました。このような貴重な機会をいただき、ご指導くださいました山本和子教授、仲村秀太先生をはじめ、感染症・呼吸器・消化器内科学講座（第一内科）の先生方に、心より御礼申し上げます。

今回発表した症例は、HIV 関連カポジ肉腫に対する治療中に全身性炎症が進行し、最終的に Kaposi Inflammatory Cytokine Syndrome (KICS) と診断された症例です。KICS は稀な疾患であり、診断や治療に関する報告も限られていることから、国内外の文献を読み進めながら病態生理の理解を深め、本症例の臨床的意義について検討しました。症例報告では、患者さんの経過をまとめるだけでなく、その症例からどのような学びを得られるのか、臨床的にどのようなメッセージを発信すべきかを日々意識し、取り組みました。

今回は英語での発表であったため、医学的内容だけでなく、英語で分かりやすく伝えることにも力を入れました。抄録の作成に始まり、ポスターや発表原稿の作成、想定される質問への回答についても準備を行いました。本番では緊張もありましたが、これまで積み重ねてきた内容を思い出しながら落ち着いて発表することができ、質疑応答を含

めて症例をさらに深く考える貴重な機会となりました。さらにこの度、医学生特別賞を受賞いたしました。医学生で一名のみ選出される賞と伺っており、大変光栄に感じております。

私自身、昨年にも学会での症例報告を経験しましたが、英語での発表および質疑応答は初めてであり、大きな挑戦となりました。限られた時間の中で要点を整理し、相手に分かりやすく伝えることの難しさを実感するとともに、その重要性を改めて学ばせていただいたことがこのような結果につながりました。無事に発表を終えることができ、現在は安堵しております。

今回の経験を通して、症例報告は単に患者さんの経過をまとめるだけではなく、一つの症例から臨床的な意義を見出し、それを他者に分かりやすく伝える過程が重要であることを学びました。また、学会発表は一つの到達点である一方で、その後のさらなる検討へとつながる出発点でもあることを強く感じました。本症例についてもさらに理解を深め、論文化に向けて引き続き取り組んでいきたいと考えています。

最後になりますが、このような貴重な機会を与えてくださり、ご指導いただきました山本和子教授、仲村秀太先生をはじめ、感染症・呼吸器・消化器内科学講座の先生方に、改めて深く感謝申し上げます。今回の経験を糧として、今後も学び続ける姿勢を大切にしながら、一步ずつ成長していけるよう努めてまいります。